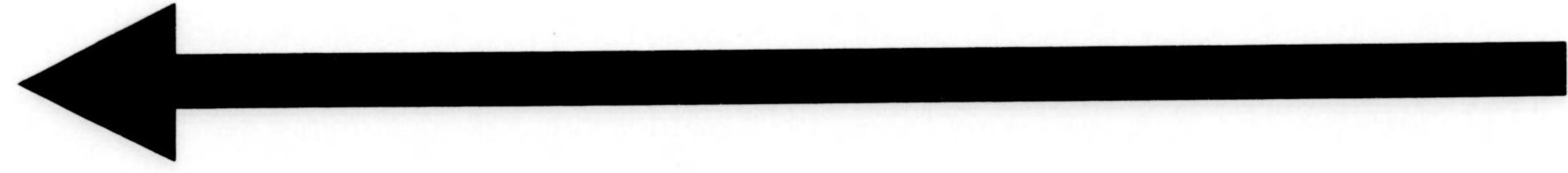




始



特103

378

大正六年  
干支藻子雛形



自序

先年来、西京に歳々の支の菓子（カシ）の雛形（ヒナガタ）を出せるも其品は東京  
向（むか）ならざる憾（がまん）あり是に於て予は日本菓子技術奨励會の需（もち）に應  
じて百科研究の餘力を用いて己年の菓子雛形を考案せり仍て  
之を菓子界の宿老に示せしに曰く一段の出色ありとて更に之に説  
明を附す可き事を勧められぬ想に東京向の己年の雛形としては  
實に新らしき試みなれば予の専攻以外の該雛形が果して  
全國の菓子業者の賞讃を得るや否やは疑はしからむと思推し  
斯に穩和なる研究家の忠言を歓迎し出版後の結果を待つ事  
と為せり一言所思を述叙し以て序に代ふ

大正五年十月

故實研究會主事

著者 平原貞治

一陰陽道より云へば己年に蛇を説くは附會なるが如きも  
著者は北辰妙見經と一行軌又は世俗の通説或は古今の  
故實等を参酌して之を圖案し且つ説明を爲したり  
一製造法は切形干菓子流し物上生型應用等を記したれど  
強ちに予の意見に拘束せられずして其形状及名義等を  
工夫し更に異様のものを案出せられん事を望む

4特103  
378

申（かみ）の年（とし）



物打

辨財天は印度の水神にして其使者  
は蛇なり故に己年の神の蛇を三つ  
鱗にて利かせ波の丸にて之を圍ひたる  
ものを俗に辨財天の御紋と云ひおせるは  
面白し此事は不忍池に詣つべし人の知

神の年



物打

辨財天は印度の水神にして其使者は蛇なり故に己年の神の蛇を三つ鱗にて利かせ波の丸にて之を圍ひたるものを俗に辨財天の御紋と云ひおせるは面白し此事は不忍池に詣つべし人の知れる處なれば更に贅せず



壽



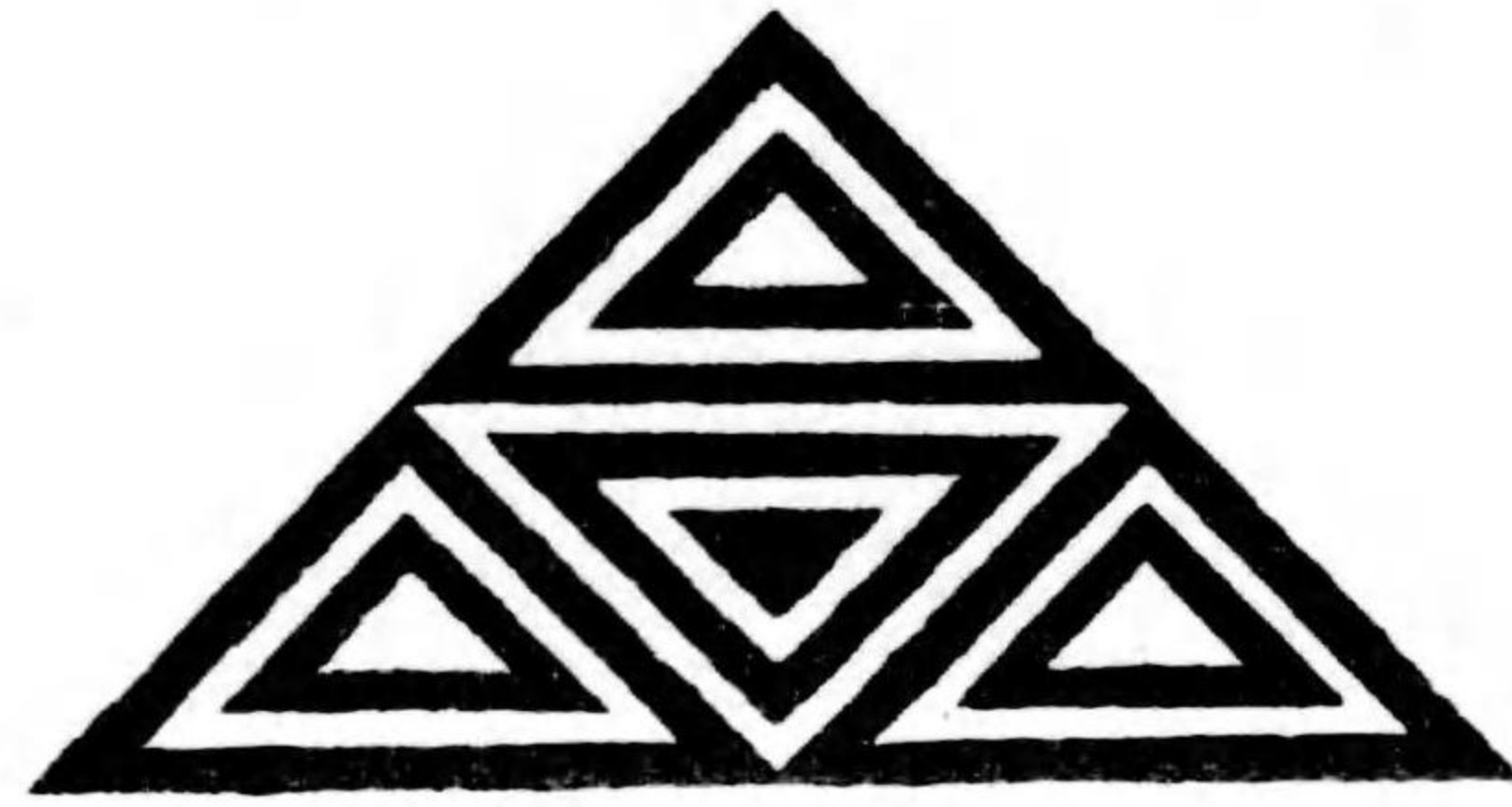
生上

陰陽調和の象を曲玉に現はしたるを壽と云ふ琵琶は辨財天の持物也ものなれば此樂器二個を抱き合はし辨財天の使者の夫婦蛇を和合し辨財天信仰の善男善女に福德を授くる意味を寓せるものなり

大正  
5. 10. 19  
内交

鱗

重



形切

鱗重は己年の蛇の卵生する態を寓せるものなり蛇を汚なし厭はし恐きものなりと思へば忌々しきも福の神なり不思議の靈力あるものと考ふれば蛇の多く産るほど目出度ものなしと信せらる

神賀字



子葉干

宇賀神は辨財天の冠のうちに安置せられある尊神なり此神は我國の稻荷大明神にも深き因縁ありて飢渴神貪欲神障礙神を調伏し一切衆生に福を授け給ふ而して其頭は翁体は蛇なりと云ふ

渦巻



形切

渦巻は水の渦巻ける形をいふ支那陰陽説に北方は坎にして水なり物に於て蛇と為す今己年の菓子之意匠に之を利かせ渦巻の水と蛇の蜷局を巻けるさまを思ひあわせて面白しと感ぜらる

蛇蕨



生上

蛇蕨は春の山に萌へ出でたる早蕨の象が蛇の鎌首を持揚げたる様なる故なづけらる柳々早蕨は詩に紫塵と詠じ和歌にも優にやさしく讀まる之を蛇蕨と云ひ傳へたるも争はれぬ形あるがためなり

叢

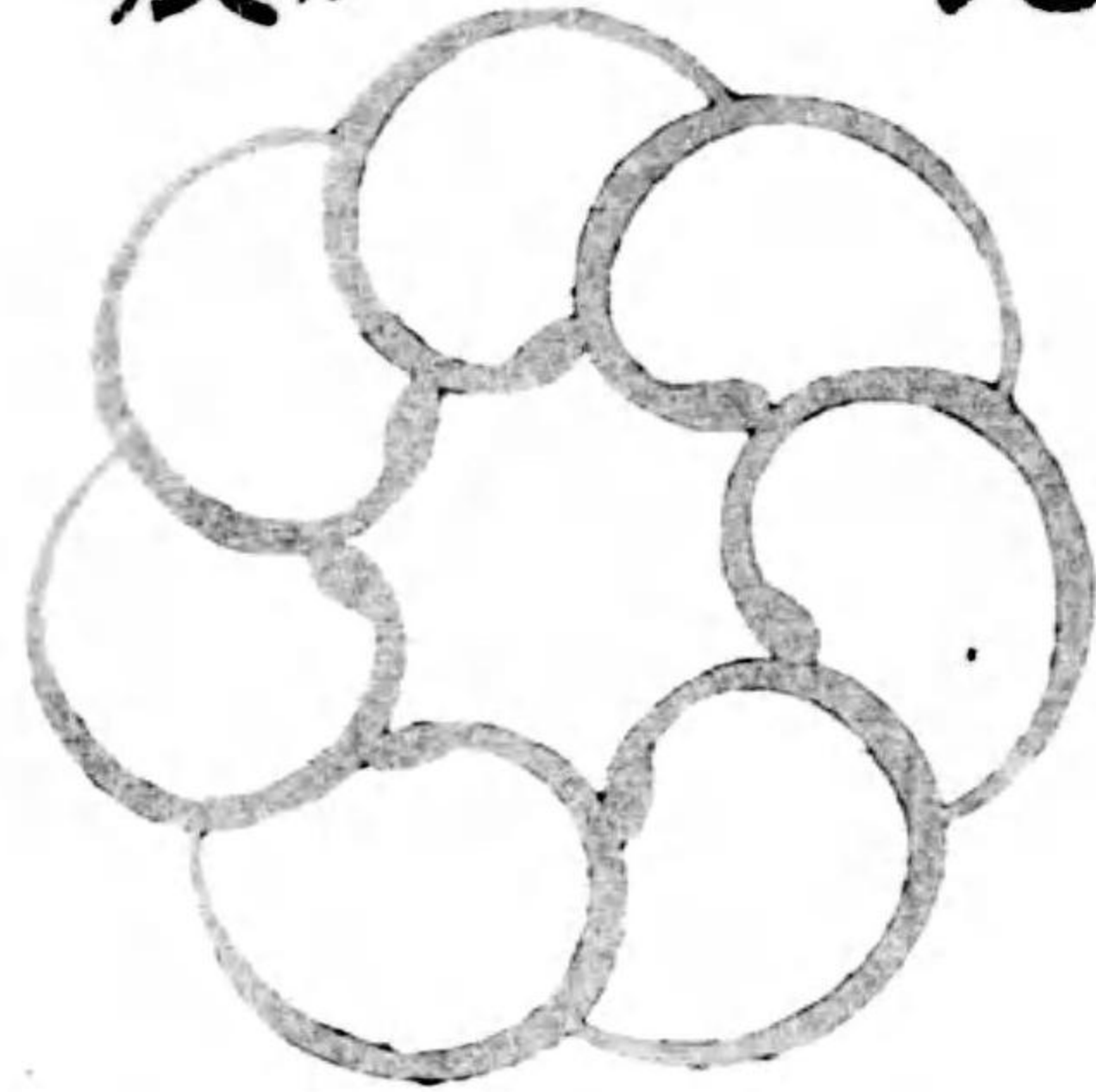


又生上

叢雲は靈蛇よく雲雨を起せる故實より意匠を出せるものなり一例すれば我が神代の昔八岐の大蛇よく雲

辰<sup>しん</sup>

北<sup>ほく</sup>



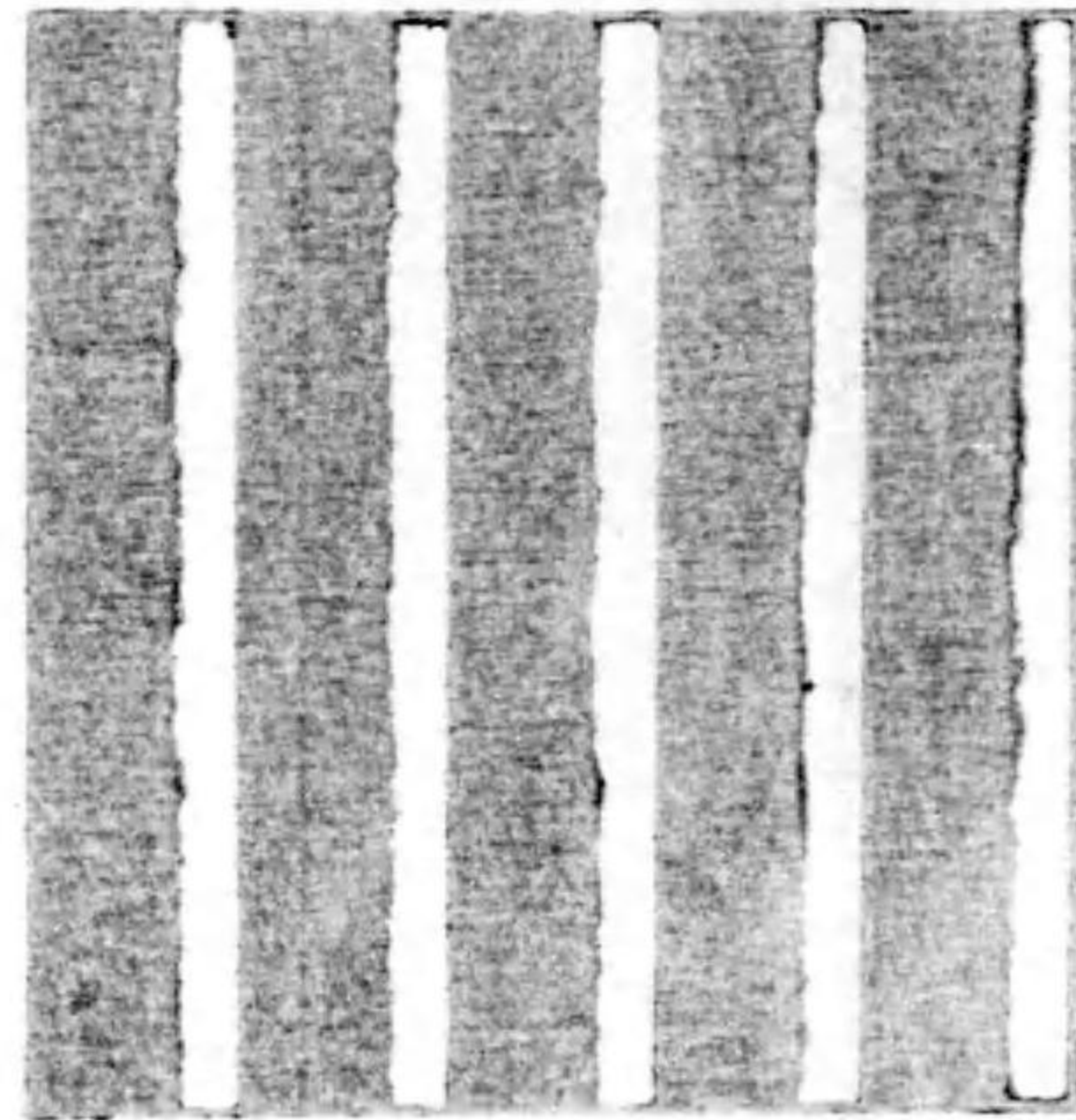
物

打

北辰は北極星を神化したる尊即ち  
北辰妙見菩薩を支の菓子に顕し  
奉れるものなり抑も此菩薩の祓儀  
の念怒身の御頭に七星を表したる  
七蛇を戴き給ふより此意匠を採れ  
るものなりと知るべし

橋<sup>はし</sup>

浮<sup>うき</sup>



物

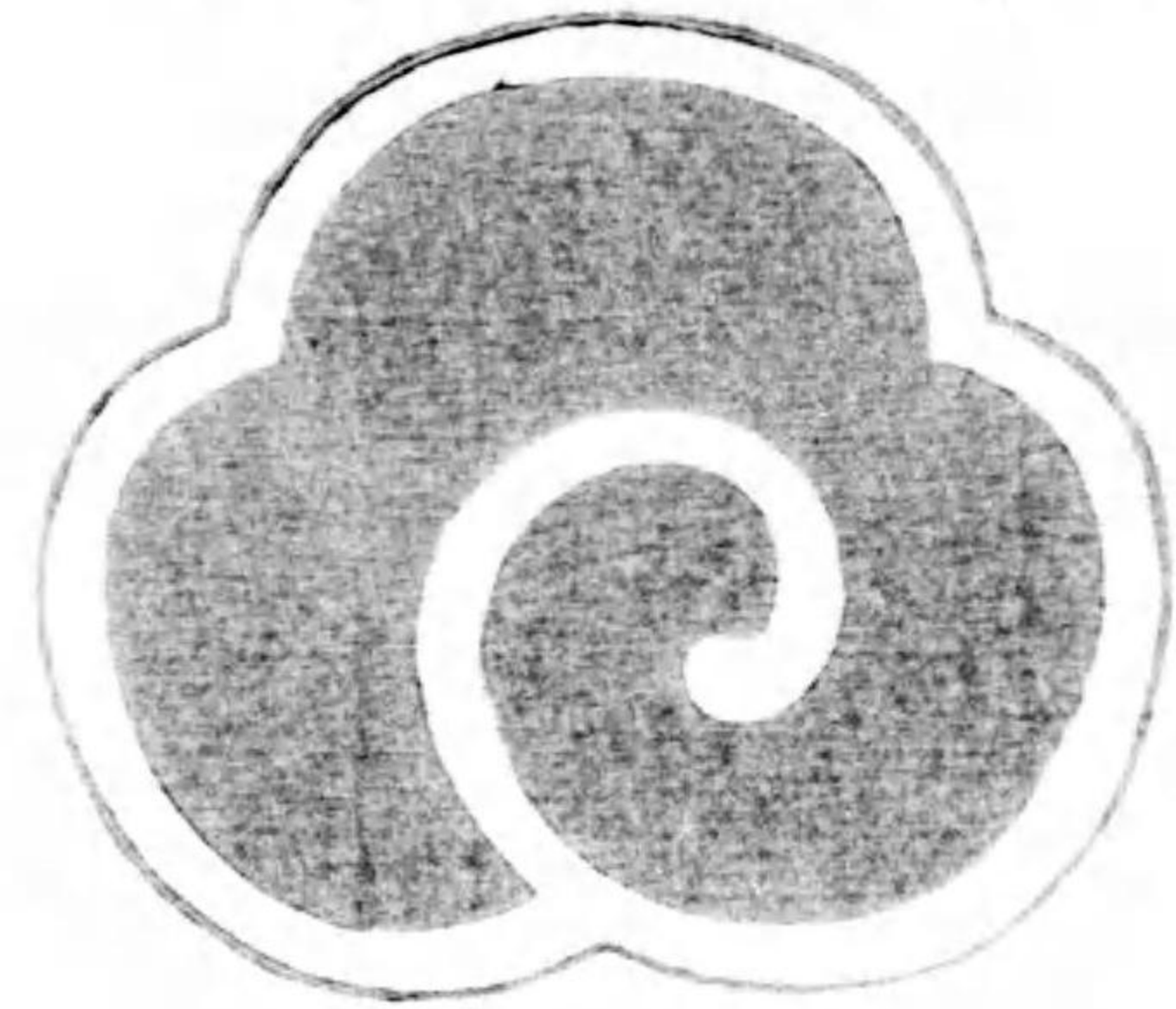
し

流

浮橋は空または水に浮べる橋の意に  
解せらるれど實は浮橋の橋板が蛇  
腹に似通へるより斯く号けたるものなり  
普通口に味ふ美はしき支の菓子を露  
骨に蛇腹と云ふを避けしは是れ考  
案者の婆心なるより出づ

雲<sup>くも</sup>

叢<sup>むら</sup>



形切は又生上

叢雲は靈蛇よく雲雨を起せる故  
實より意匠を出せるものなり一例す  
れば我が神代の昔八岐の大蛇よく雲  
を起して其叢れるうちに居れり素盞  
鳴神これを殺し其尾より剣を得た  
まへる事みな人の知れる處なり

北條



羊面

北條氏は封建時代の六波羅模様にして素袍に付けられたる地紋なり北條時政いまだ頼朝を援けざりし時一歳武運を竹生嶋に祈り子孫が六十六個國の

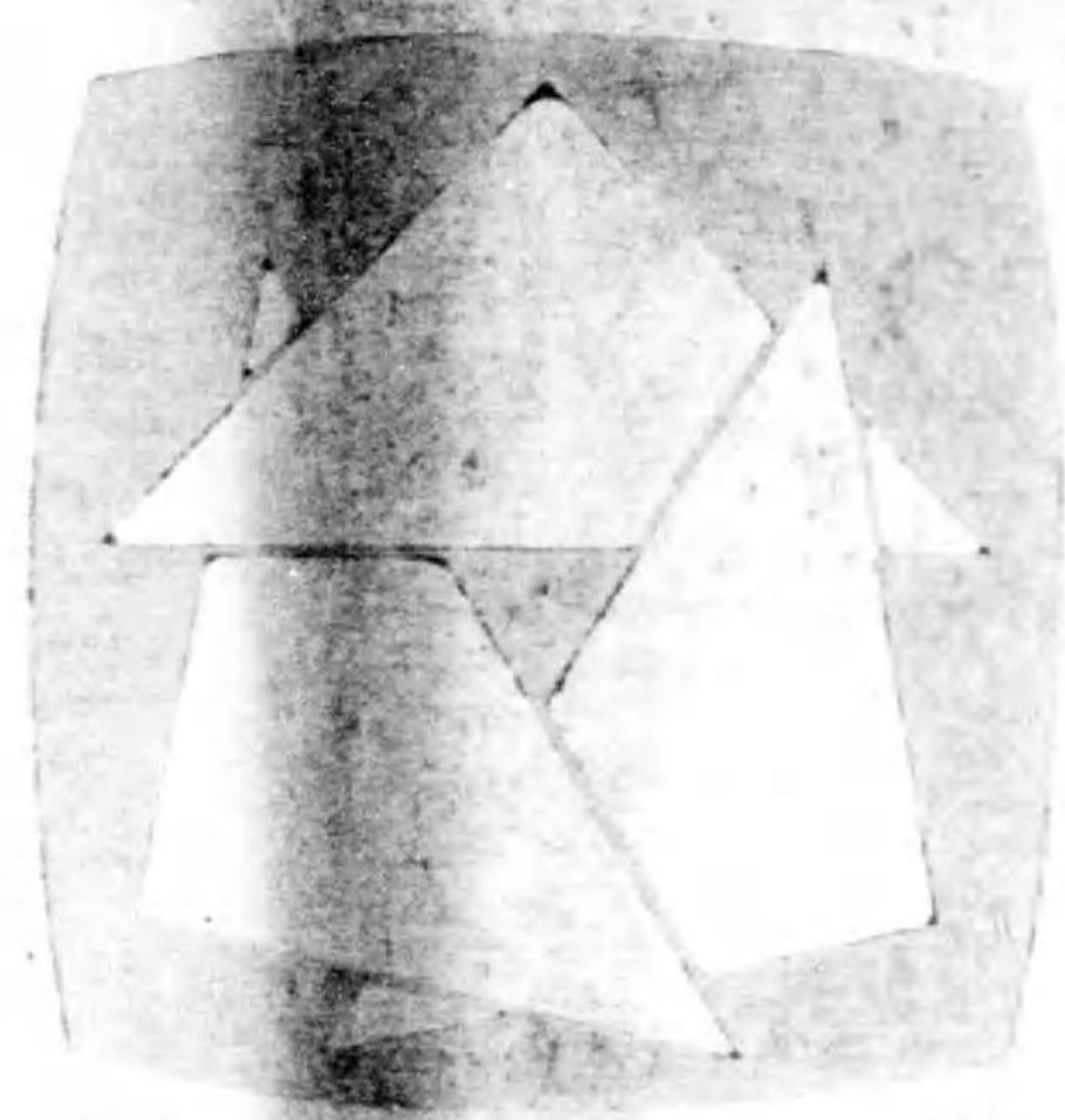
蛇の目



形切

蛇の目は加藤清正の紋所なり法華經信者は物々しく其の紋所の事を説けりされど其由緒は加藤家の祖先が悪蛇を退治せしより之を紀念に紋所につけたりし由考案者は只々六に巳年に因み之を出せるのみ

卍字鱗



物し流

卍字鱗は三つ鱗が卍字に廻はれる象にして親子相續して尺くることなく目出度きまを現はせるものなり故に卍字鱗と号けぬ而して此象は印度の劫初の梵天毘紐女の生殖を意匠せるものなれば蛇崇拝の原始と知るべし

福袋



生上

福袋は誰しも欲しがらる財布なり丸の輪は蛇中に財布を福袋に代たるは考案者の苦心にして昔の俗謡に「白蛇の出るのは柳島、縞の財布に五十両支の菓子としては此意匠は實に面白きものと謂ふべきなり

目



形

所につけたりし由考案者は只々六、  
に巳年に因み之を出せるのみ

北條形



面羊羹

北條形は封建時代の六波羅模様  
にして素袍に付けられたる地紋なり北條  
時政いまだ頼朝を援けざりし時一歳武  
運を竹生嶋に祈り子孫が六十六個國の  
執權たるべき由の示現を蒙り其跡に三つ  
鱗ありしを紋所せしより此模様出しと云ふ

己成金



焼物

己成金は是は不忍の辨財天に己巳の  
日参詣したるもの知る處にして白蛇  
の精金に化し金の精白蛇に化すと云  
へる傳説と蛇が此辨財天の使者なる  
より此天の福德の靈験を斯く現  
せるものなり

如意寶珠



上生

如意寶珠を右と左に現はしたるは  
年の始より福德多かるべく蛇の此  
寶珠の因縁ふかきに思ひ付き女蛇  
男蛇を利せたるものなれば意匠  
としては意味深長なり因に蛇五  
百年を経て此寶珠を感得すと



武 玄



形切は又物焼

玄武是は北方の神の名にして亀に契れる蛇の象なり故に鱗形のうちに亀甲くづしを出せり而して其尊靈は北斗の最貴の主神尊星王の大熊を為す時の形なれば己年の除災求福に大関係ある故斯に之を出せり

洲 八 大



物 打

大八洲は一四季嶋とも云ふ我が日の本の異名なり此島形のうちには朱の玉籬を出し華表を出し榮へる木を出せるは蛇に深き因縁ある倉稻魂稻荷大神をよびの御社を現はし五穀成就の意を凝せるものなり因に稻荷の本地は辨財天なりと

司 の 寶



物 形

五蛇を利かせたる寶の司は春は青夏は赤秋は白冬は黒四季王用は黄色の如意寶珠を以て蛇の意を現はしまた其中央に蛇足なから支の己の字を出したるは一見して誰にも支の知れる様にせるなれば讀者之を咎むること勿れ

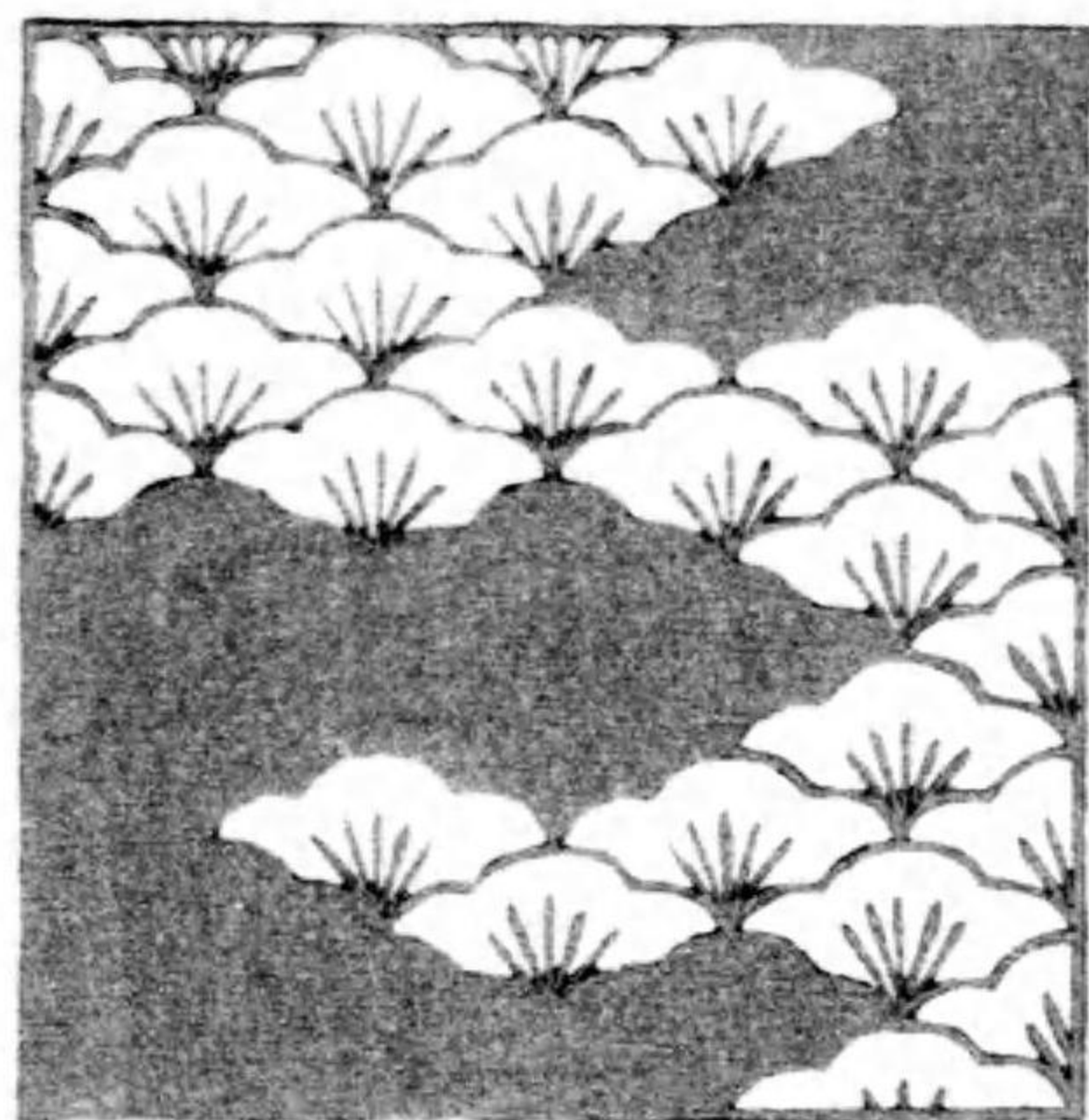
延



上

延壽は延命長壽の略語なり此意匠は藥師如来の御心を現はる中に此如来の十二神將の己の神因特羅者を鱗一つに出せるものなり因に此雛形よりも櫃

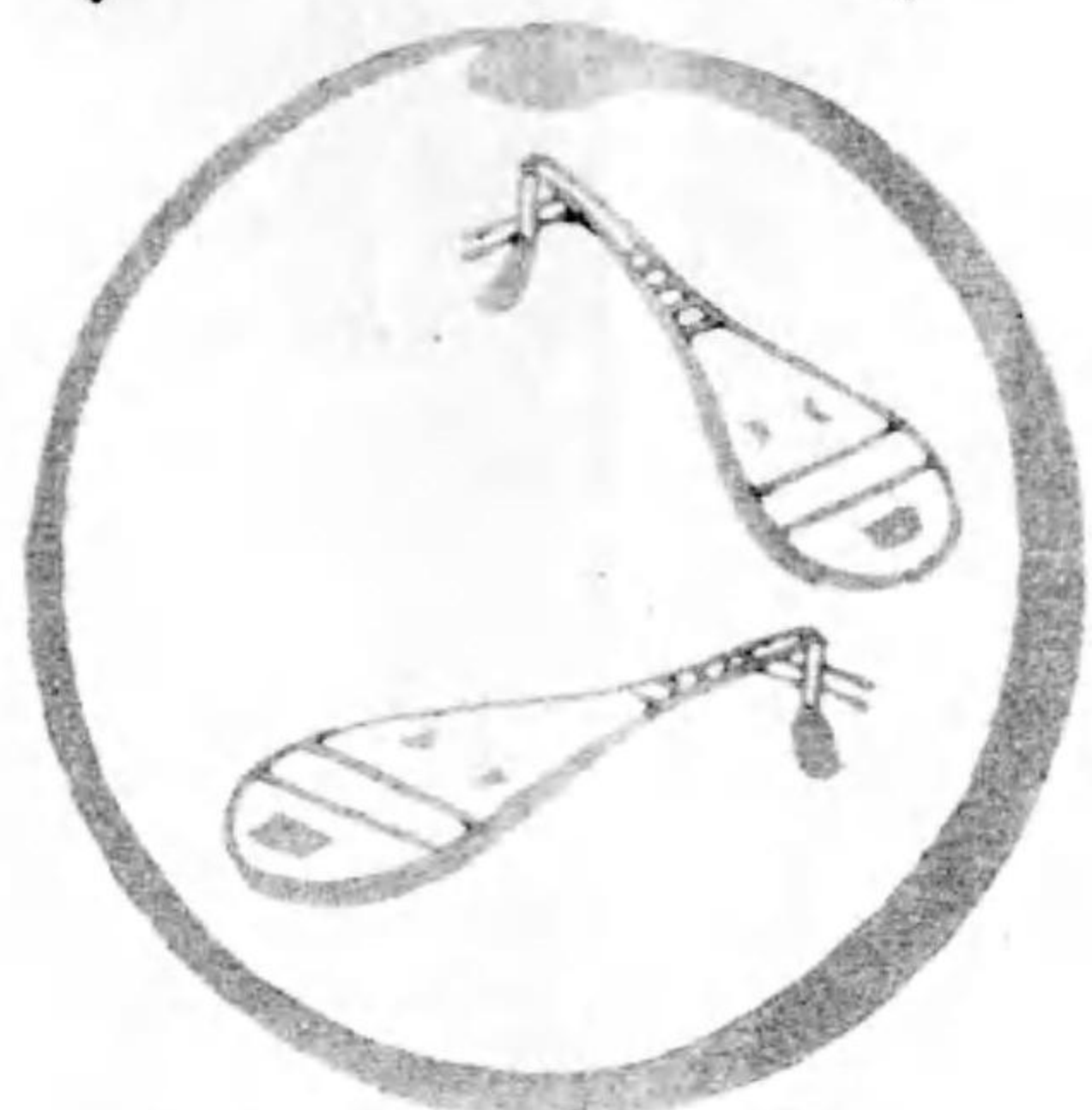
松の年千



子葉干

千年の松の意匠は有鱗模様にては鱗松と云ふ松の常盤の幹が千年を経れば其皮は龍の鱗、蛇の鱗の如くなるより昔は堂上方の目出度織紋と称せらる今蛇の鱗と云は餘りに考なきに似たれば松の目出度と以上の義にとり此名を付けたり

幸の年



生上

年の幸は辨財天の一切衆生に福徳を與へ給ふ本誓の妙なる調へ糸の音の琵琶二個を丸板の蛇のうちに出来るは夫婦和合を祝へるものにして一切の幸福おれより生ずと思はれる即ち年の始に之を食はば幸益々多からん

壽延



生上

延壽は延命長壽の略語なり此意匠は藥師如来の御心を現はる中に此如来の十二神將の己の神因特羅者を鱗一つにて出せるものなり因に此雛形よりも櫃形にや丸く巧み藥壺につくり次に型にて鱗一つを出せば一層妙ならん

司



物

是は一見して誰にも支の知れる様にせるなれば讀者之を咎むること勿れ

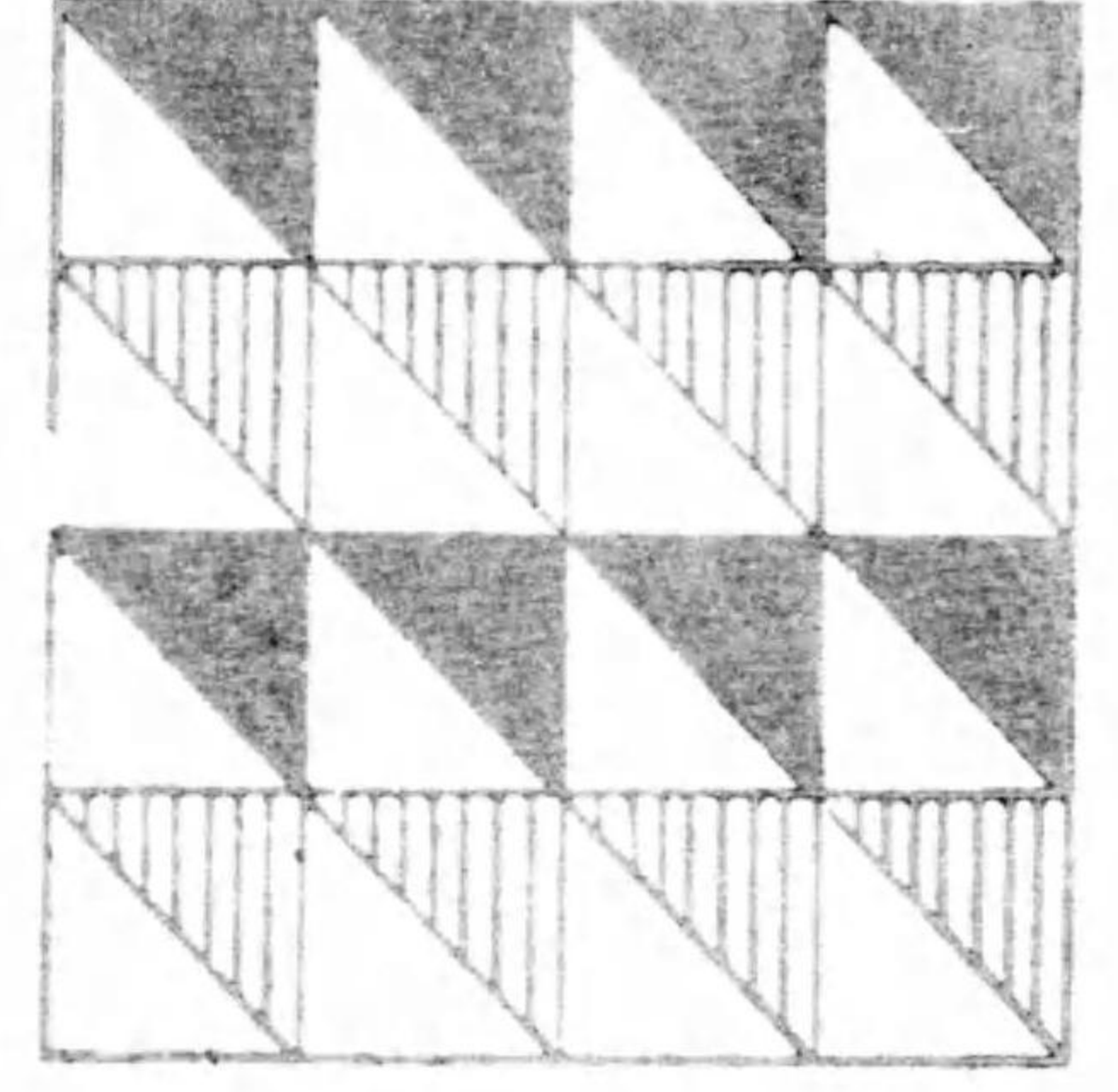
城 還



打

還城樂は古代の舞樂にして蛇を捉ふる勢なり王朝時代にては此樂は最も重んぜられたるものにして天下泰平の舞なり

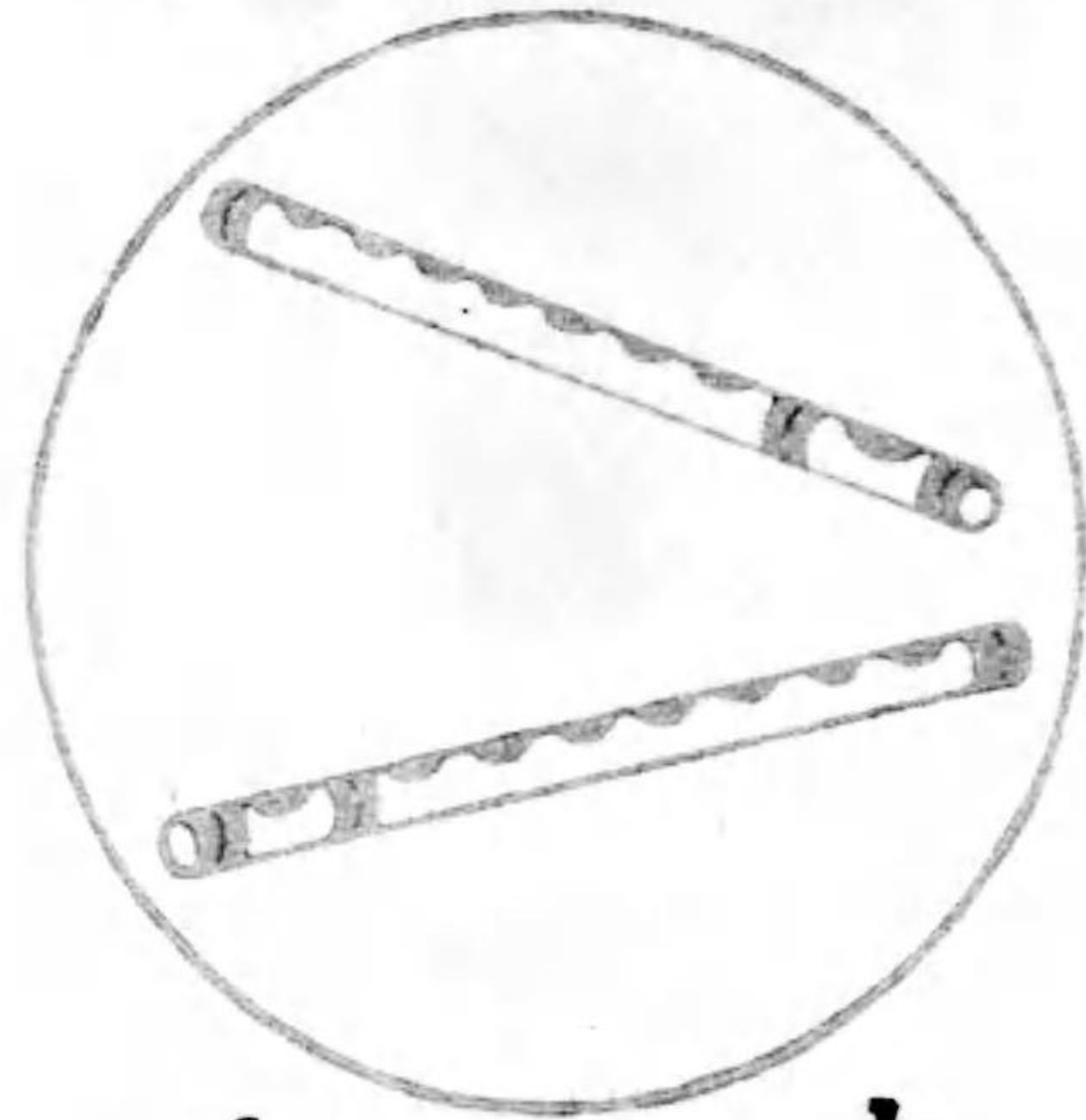
鱗 斜



物し流は又子菓干

斜鱗は北條執權の庶流の素袍の模様なり宗家は北條秋と称ふる紋所つなぎを素袍に用へたるに對して本分の位地を區別せられたるはうはし之を干菓子或は流し物に用へば支の己年の菓子の面白きものを製得なり

音ののき清



生 上

清きの音は笛の玲瓏玉を轉がす如き音を云ふ蛇は笛の音を好み清き響妙なる曲節に集ると傳へ高野山にては笛の音を禁する避蛇の一法ありと稱ふ嘗て大蛇牧童の笛に聞とれし談あり因に輪は蛇なりと知るべし

歳 己



物 打

有職模様の龍を草に織出せるものと此己歳とを比較するに己の蛇は辰の龍よりも品位劣れり又其故實より云へば龍貴く蛇賤しきは是非なきも其執着は龍よりも深し菓子屋も蛇の如く業に執心ならは富巨萬を積むこと容易ならん

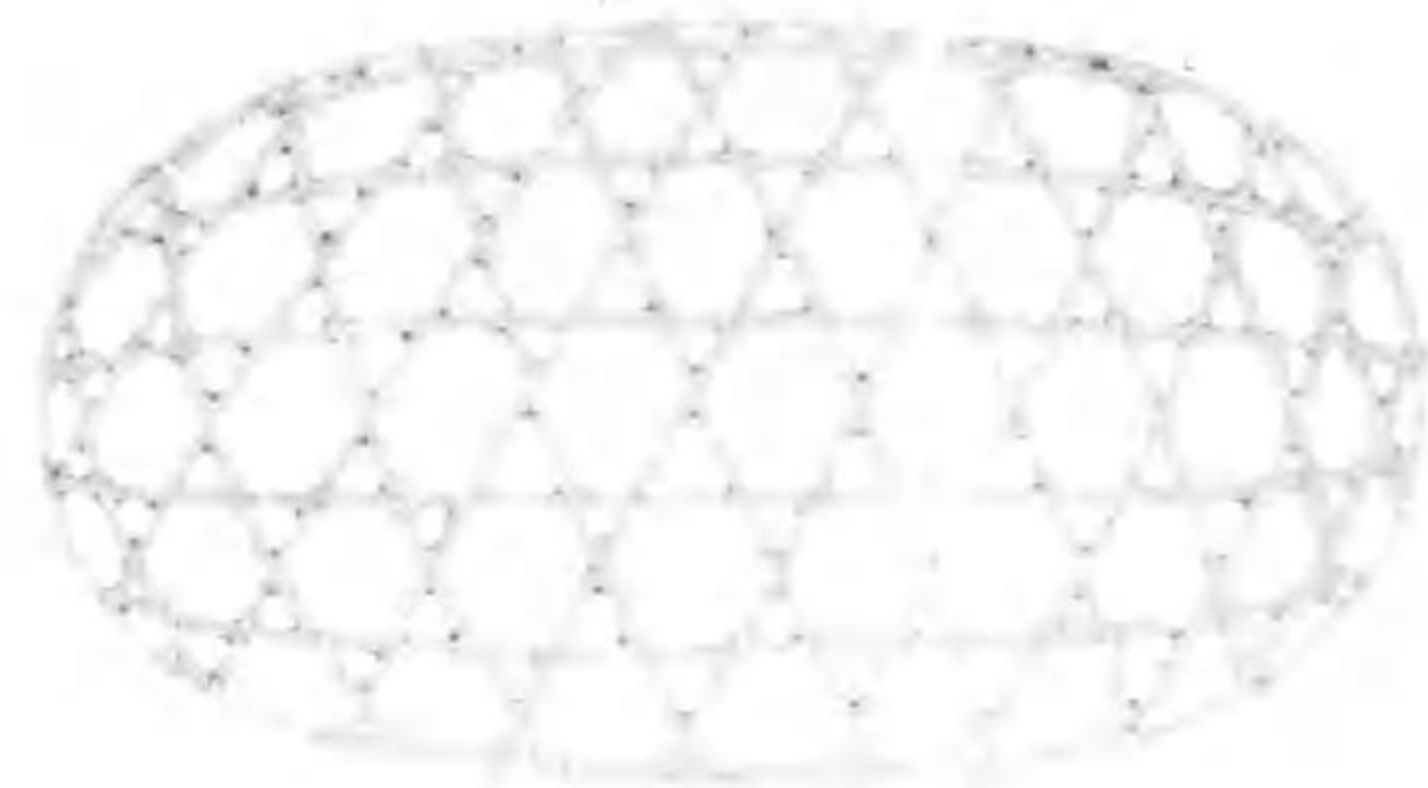
守の年



物打

年の守は九頭龍王の使者九蛇を如意  
 寶珠九個と鱗狀にて現はせるものなり  
 夫れ九は陽の極數にして印度支那みな  
 此數を貴べり此意義に符合せる九蛇は  
 年の守として大正六年の運命を司どり  
 狂盛ならしむべき靈力を有せりと知るべし

籠蛇



生上

蛇籠は速瀨の洪水の時之を防ぐために  
 工夫せられしものなり己年は蛇多くまた  
 雨多く降ると云へる傳説により此蛇籠  
 が蛇の鱗に似通へたるを思ひ付きて  
 之を出せり此狀は繪になり居れば  
 や、櫃狀に菓子に巧まるべし

樂城還



物打

還城樂は古代の舞樂にして蛇を捉ふ  
 る勢なり王朝時代にては此樂は最も重  
 んせられたるものにして天下泰平の舞な  
 りと稱せられぬ其故實は此五行に尽し  
 得べきものにあらざれば略してのせず其  
 仮面の怪訝なるを見て軽んず可からず

鱗



物

年の菓子の面白きものを製得たり

國の基



燒物

國の基は農なり稻穀を作りて人の生命を保つ具を備ふるを以て昔は士の次に位し工商の上に居む此農の豊年は古來蛇の加護によれる奇談多し二枚の鱗を順逆にせるは陰陽の象其中に卦を置けるは五穀成就の意なりと知るべし

年三の賢



打物

年の三賢は松竹梅なり己年の蛇の鱗のうちに之を現はしまた其中央の鱗のうちに如意寶珠を顯はせるは年の始の新玉に此目出度極まり無き義を寓せるものなり此意匠は賢者は御代の寶を説ける心をも籠めしものなり

御代の榮



上生

御代の榮は五風十雨よく時を違はずまた疫病の流行等なきは是れ陰陽自然の妙境なり黒の鱗は陰白の鱗は陽にして俗に之を晴明鱗と云ふ此意義を布衍すれば國豊に家足り御代は萬々歳の榮を壽ぶく事を得む

大正五年十月十四日印刷

大正五年十月十七日發行

大正五年十月<sup>十四</sup>日印刷

大正五年十月十七日發行

東京市赤坂區新町五丁目五番地

著作者 平原貞治

東京市神田區五軒町十五番地

發行者 田中久次郎

東京市日本橋區岩代町一番地

發行者 永田七五郎

東京市下谷區竹町廿七番地

印刷者 益川倉吉

東京市下谷區御徒町一丁目六十九番地

印刷所 三宅仙太郎

神田區五軒町十五番地寸七榮方  
日本橋區岩代町一番地寸七方

發行所 日本菓子技術獎勵會



終